

# ペンバートンによる枝幸日食記

佐藤利男

東亜天文学会 〒179-0072 東京都練馬区光が丘3-7-4-301 (自宅)

## まえがき

ここに紹介する記事は、『コロネット号の思い出』(Coronet Memories: Log of Schooner-Yacht Coronet on her Off-Shore Cruises from 1893 to 1899) に収録されたもので、その第6部付録「蝦夷・枝幸のアマースト大学日食観測所からの書信」(Letters from Amherst Eclipse Station, Esashi, Yezo) の抄訳である。

内容は、明治29年(1896)8月9日に北海道オホーツク沿岸地方で見られた皆既日食を観測するために、枝幸に布陣したアメリカのアマースト大学の観測隊の日々の動きを綴った日誌で、筆者は観測隊の一員であったペンバートン(John Pemberton)である。



写真1. コロネット号

M. L. Tood, 1898; Corona and Coronetより転載  
[MR. JAMES'S SCHOONER YACHT CORONET]

一行は大型帆船「コロネット」号(写真1.)で横浜に着き、ここで枝幸に赴く観測隊と、関東関西地方に周遊する観光組に分かれたが、この日誌は枝幸における観測隊の動静を観光組に知

らせるために、「コロネット」号ジェームズ船長の夫人(H. P. James)に宛てて書かれたものである。その内容は、以下の記事に見るとおり、一部に私的な感想、意見を述べたところもあるが、大要は観測隊から観光組への状況報告であり、そのような観点から観測隊の行動をありのままに示す資料として、この書に収められたのであろう。

日誌は7月4日付の北に向かう船上からの報告で始まるが、ここではこの最初の部分を省略し、枝幸に到着する3日前(7月7日)の記録から紹介する。

なおこの日誌に出てくる人物については、その立場はもちろん、担当する業務についても、アメリカからの長い船中生活を通じて、当事者間では当然に了解されている前提で書かれているが、初めてこの日誌に接する者にはそれが判然としなない。それで以下には、参考までにその経歴などについて知るところをごく簡単に記しておく。

まず筆者であるペンバートンは、アメリカ海軍に属し、この時期には進級待機中の機関科要員(Passed Assistant Engineer)の地位にあった。彼は明治20年の白河(福島県)日食の際にもトッド夫妻と来日した経験があるが、天文学の専門家ではない。

観測隊の隊長「トッド教授」(David Peck Todd)は、アマースト大学の天文学教授で、同大学の天文台長。世界各地へ数多くの遠征観測の経験をもつ。

その夫人のメイベル・ルーミス・トッド(Mabel Loomis Todd)は、著名な文筆家で、来日当初は観光組と一緒に関東、関西を回り、その後日食の4日前(8月5日)に枝幸に着いて観測隊に合流

した。彼女には、このときの日食観測遠征記『コロナとコロネット』(Corona and Coronet) という著作があり、その中の一章「北見・枝幸」(Esashi in Kitami) は、先年地元枝幸の高島孝宗氏(枝幸町教育委員会)ほかによって、初めて翻訳が発表された(高島・山浦, 2010)。

ゲーリッシュ(Willard P. Gerrish)は、ハーヴァード大学天文台の台員。

トンプソン(Thompson)は、アマーフト大学の機械技師で、遠征中はコック役を務めたようだ。息子のフランク(Frank)を同行。

小川一真は著名な写真家で、9年前の白河日食の際にもトッドに乞われて写真撮影を担当し、今に残るトッド隊による二つの日食観測の現場写真は、すべて小川の撮影によるものである。

\* \* \*

蝦夷・枝幸のアマーフト大学日食観測所からの書信

**7月7日** 朝3時半ごろ汽笛が鳴って目が覚めた。左舷から外を見ると、霧に包まれていて風が強く波が高い。午前8時ごろに稚内に着いて、海況や天候について枝幸に電報を打った。ここの港は船着きにはよくなくて、この天候下では荷物を下ろすのは難しく思われた。

2時ごろに濃霧と荒波が収まるまで待機するように返電があり、ここで天候の回復を待つことにした。私はそれを望まなかったが、トッド教授は穏便にそれを受け入れたので、私は船内での仕事に従うことにし、作業ズボン、ジャケット姿で船内作業を手伝った。

**7月8日** 早朝に船を6~8マイル離れた湾内の少し穏やかなところへ移動したが、天候は一晩中好転しない。皆がいろいろ働いた。今朝の私の仕事はパイプ作業を手伝うことで、午後は以前にもやったことがある黒ペンキ塗りを引き受け、このたびは木製の小箱(ブリキ製は除外)に塗った。

天候は夜が近づくにつれて和らぎ、宗谷岬に向けて航行したが、もし岬の外側が荒れていて危険であれば、岬の内側に停泊するつもりであ

った。私は「コロネット」号を離れてから、ちょうど1週間が経過したことを思い出した。それで、あの船やそこでの楽しい共同生活が、今はまわりにないのを自覚したのは、私にとって「第一課」の知識であった。

**7月9日** 日食まであとちょうど1か月となった。昨夜は誰も外に出なかった。風はいくらか強くなったようだが、朝10時ごろ枝幸に向けて出発した。日本のホーン岬(宗谷岬)を回る荒れた航海であった。

「トッドさん」は船室にこもって姿を見せない。ゲーリッシュも朝食をとらなかったようだ。日本の学生(後出のノザワ?)はベッドに倒れ込んでいる。とても寒く、雨が降っている。私はほとんどベッドの中で寒さを避けていた。

この2日間は朝食は日本食をとってきた。おそらく船内に洋食のストックが乏しくなってきたからであろう。悪天候で今日は何の作業もできなかった。

**7月10日** 今日遂に観測基地を設営する枝幸に到着し、いろいろ忙しい一日となった。積荷をすべて下ろして屋根のある場所に運んだ。トッド教授とノザワ(野沢?)氏は朝早く上陸して、この地方の役人と会い、手早く万般の調整を行った。

ここには焼き払われて何にも使われていない場所があり、平坦で面積もあって、観測隊の「ジャイロスケューチ」を設置するのに十分である。またその近くの大きな家屋の2階には、観測隊の機材が保管できそうだし、われわれ自身だって居住できるかもしれない。

観測隊がここを観測場所とすることにし、機材を陸揚げした海岸近くの仮設小屋あたりを見回したときに、今は使われていない学校の大きな建物があって、そこは観測隊が自由に使用できることがわかった。調べてみると学校の裏側には空き地があって、先に見た場所とほぼ同じ広さがあり、2つの場所はつながっていることがわかった。そこは少し高くなっていて周囲の状況もよく、適度に平坦で、その一角には小さな野菜畑になっている。ここは観測隊用に用意されたもののようであった。

この校舎には長さ55フィート、幅20フィートほどの広い部屋があり、これは倉庫にも作業場にも使える。加えて部屋はトッド教授のオフィスや寝室、隊員の宿泊所、食堂や調理場にも適当である。そこで近くの海岸に置いていた荷物を、直ちにこの宿舎に運び入れた。

この町自体はそれほど大きくない漁業の町で、日本式の旅館が一、二軒、それに商店が数軒ある。町では魚の臭いが強いが、観測所の場所ではそれほどでもない。あたりには小蠅が飛び回っているが、観測隊メンバーからは苦情を聞かない。網を張ってひまし油を使うか、それともタールを塗るかは、今のところ決めていない。しかし天気はなお涼しく、海から吹いてくる風があるので、いずれその話が出てくるかもしれない。

夜になる前に、トンプソン氏は自分の作業場を立ち上げて、そこにハムやベーコンなどをずらりと並べたので、まるで角の食料品店のようであった。明日は何もせずに寝ていたい。今夜は旅館で寝られるのだ。

フランスの学者（デランドル、著名な天体物理学者でのちにパリ天文台長）と「アルジェー」号艦長、それにこの地方の役人の訪問を受けた。

あなたは私の針仕事に興味をおもちなのでお伝えするのだが、今朝下船する前にふだんはいているズボンの修理をした。ズボンの脚の上に折り返している部分を切り取って、それをほかのところにアップリケのように縫い付けた。これは結構うまくできたと思う。仕上がって出来栄えを確かめるために明かりにかざしてみたら、なんとよい前兆が現れている。「コロナ」が見える。それも2つだ。2つの暗い部分が明かりに取り囲まれているのだ。確かに暗い部分は周りにはない。私はこのことを仲間に伝えたところ、彼らは日食の当日に私がそれを身に着ければいい、と考えたようだ。もし今から日食までこれを着るとすると、下手をすると「コロナ」だらけになるかもしれない。脱線話になった。おやすみなさい。

**7月11日** 今日観測所本体の脚を立て、テントを張り、仮設小屋に収めた箱を開くのに費やした。天気は見事に晴れて、太陽は午後の日食が

見られる時間にはちゃんと出ている。

アンドリュー（「コロネット」号の航海士）はなかなかの腕利きで、日本人を使ってきばき仕事を進めている。周りには大勢の日本人が集まって、窓の中をのぞいている。アンドリューは彼らにロシア語、英語、日本語をしゃべり、それに引き寄せられた女性が古い引き戸をいくつか持ってきた。彼はそれで共同宿舎の自分が使う場所を囲った。

宿営場所はとても快適である。私は安っぽい材料で僅かな場所を確保し、とても居心地のいい専用部屋を作った。今夜は、そこに人に笑われそうな小さいポケットを掛けて寝られるのだ。ここには来月あたりまでずっと過ごすことになる。

私は、トッド夫人が肘を揺らしながら、また両手を握りしめながら自然の光景に感嘆していたのを思い出し、いずれそのノートを見せてくれることを願っている。船長から、ほかの「若々しい」皆さんにも、またスレイド嬢（観光組のメンバーの一人であろう）にも、最大の親しみを込めてよろしく、とお伝えください。

**7月12日** 日食まであと4週間となった。今日は晴れて、太陽の下では暖かいが、日蔭に入ると涼しい。いくつかの小作業を行い、日記を書いてあなたに送った。

午後5時に5人の日本人紳士、すなわち町長と観測所用地の地主、他に3人を招待した。双方から表敬の挨拶が交わされ、それをノザワ氏が通訳した。トッド教授が客に紅茶を供するよう指示があったので、私はコックに急いで出すよう伝えた。紅茶とともに何か食べ物を出したいと思ったので、私はひそかに見つけていたプレッツェル（ビスケットの1種）の缶詰を開け、またコックは焼きドーナツのようなのをそれに加えた。客はこのもてなしを喜んでくれ、何度もお辞儀して帰って行った。コックの腕は大したものだが、ただ心残りはパンがなかったことだ。

「ドク（先生）」と呼ばれたので行ってみると、軍医助手である私の能力ではかなり難しい問題が起きていた。一、二日前にフランク・トンプソンが、積んであったテントのポールが崩れ落ちてきて転倒したのだが、すぐには立ち上がれな

くて、足の膝を脱臼した、というのだ。彼は「大丈夫だ。あそこで滑ってしまった。」という。私は初めかなりあわてたものの、すぐにどう処置すべきかわかっていた。ただ彼の体をまっすぐに引っ張るべきか、それとも曲げた方がいいのか、については確信がなかった。それで彼は初めから痛みで体を曲げてきたので、そのままにしておくのが適切だと思った。彼は「大丈夫だ」というので、私はすぐに「ポンドの調合剤」を作り「静養」を勧めた。患者も前からそのように考えていたようだ。

また今日の夕食時にはちょっとした出来事があり、それについても記録しておくべきだろう。コックは日に3度コーヒーを入れてくれることになっている。それが夜は紅茶にしてコーヒーは出さないように提案があった。思うにコックは皆がそれを望んだように受け止めたらしい。夕食時に、紅茶だけと知ったとき、皆の驚きは相当なものであった。この冗談話はもちろん「主任」の私から出たものである。何人もが面白くない様子なので、これは少しばかり雰囲気をごわした、と思った。それでも、われわれは冷えたハムなどでもなんとかやっていくのだ。このような事態がまた起きないように心に決めた。

**7月13日** この日誌では自分のことばかり書き過ぎて、一般の出来事はほとんど書いてこなかったようだ。しかし今朝は、また全く突然な出来事に当面せざるを得なくなった。

私が写真板容器の果てしない作業を始めていると、トッド教授から声がかかって、私の担当の医者の仕事でフランス隊の営舎に行ってしまう、というのである。水夫の一人が病気になったが、フランス隊には医師がいないという。それで「先生」（すなわち私）が用意した薬瓶と処置法の資料を持って、教授と私の助手役とともに駆けつけた。私は実際に医学を学んだことはないと伝えたのだが、薬と処置法の資料は大いに喜ばれた。そこにいる間にも、また別の病気の弱気味の人を診るよう頼まれた。フランス隊のテントには、このような弱気味の人が何人かいるようだ。患者の脈をとってみたが、うまく回復したかは疑わしい。私は静養することを勧めた。用務を済ませてフランス隊の本部で、

ビールとコニャックを飲んだ。午後に報告があって、二人の具合はほとんど変わらない、ということであった。容体が前より悪くなっていないのは有難い。

仮設の観測小屋の建設は順調に進められ、皆の協力で見事に完成した。写真家の小川（一真）は一、二日のうちに到着するようだ。

午後にアイヌ人が一人道を横切っているのを見て、コックが声をかけた。そして観測隊で雇っている日本の職人に頼んで、アイヌ人の音楽について聞いてみた。その男は髪が長く毛むくじゃらで立派な風貌だが、おとなしい感じでラップを吹くことには無関心だった。そのようなわけで、枝幸のアイヌ人からは、あなたのコレクションに寄与することは難しいのではないかと心配している。その男は、この町にはアイヌ人は10人ほどしかいなくて、ラップの類は全くと述べた。

**7月14日** われわれは旗竿を2本立てて、1本にはアマーストの旗とともに星条旗を、もう1本には日本の国旗（日の丸）掲げた。トッド教授の話では、土地の良識ある人たちの集まりで、日食の当日には木を燃やさないこと、また料理は前日に作っておくか、それとも代わりに炭を使うか、を申し合わせたという。これは清浄な空気を確保するためである。今夜は少し気持ちが落ち込んでいるようだ。コックが夕食に日本風のスープを出したのが原因か。

**7月16日** 寝る前に狭い私室でローソクの明かりの下、このいつもの日誌を書く。皆相当にへばっているようで、夜の談笑はほとんどなく、皆早々に部屋に引き下がった。私にとって、このささやかな報告を書くのは実に楽しい作業で、このことであなたや「コロネット」号の人達と合っている気持ちである。

観測小屋はほぼ外側が出来上がった。様々な望遠鏡類が架台に固定するために用意され、また乾板装置を検査したり調整したりする雑多な作業が行われた。

アンドリュウとは大の仲良しである。来年彼と一緒にロシアに行く際には、嬉しいことに彼は私を招待したいと言ってくれている。我々は

洗濯をしたが、下着に糊をつけたり、間違っ  
てズボンをしわだらけにしているが、こちらは  
このような些細事には全く意に介さない。アン  
ドリュエは「主任さん、これは笑い話ですよ。  
あなたは料理の担当だから、コックがテー  
ブルに料理を並べた時に、さらに驚くよう  
なことがありますね。」と冷やかしたので、私  
は「アンドリュエ、私がコックに対して邪  
魔しない方が、皆にはいいようだ。」とや  
り返した。トッド夫人が到着すれば、私は  
食事の担当を引き継いでもらいたい、と思  
っている。

**7月18日** 手紙が2通届いた。一通は（コロ  
ネット号）ジェームズ船長からトッド教授宛  
のもので、皆さんが瀬戸内海へ出かける前  
に横浜で書かれたものだ。もう一通はゲー  
リッシュ宛のもの。これら2通の手紙は、  
函館の近くの別のエサシ（江差）に送ら  
れたらしい。昨日汽船がここに寄って南  
に向かい、郵便を発送する機会があった。  
小川氏が今朝早く助手たちを連れて到着  
した。今回の旅行はとても退屈だ。毎日  
が前日と同じなのだ。

今日の私の仕事はまさに「何でも屋」であ  
った。初めは電気屋で電池の接続を行っ  
た。次は大工仕事で、車輪にネジで小箱を  
取り付け、四角い木材部分にペンキを塗  
った。他方黒いビロードを長四角形に切  
り抜き、それを箱の内側に張り付けた。今  
朝は、ベビーカーにしては珍奇な車輪の  
ついたサンパン（小舟）ができたようだ。  
漁師のやさしいパパが、子供に遊びの舟  
を作ってやったようなもので、これで子  
供は海に行かなくても舟遊びができる。  
これにはマストのほか、日射や雨を防ぐ  
位置に屋根のようなものもあって母親役  
の私はこれを引いて通りを歩いた。

**7月20日** 今日はまた曇りである。もち  
ろん皆忙しく動いている。アンドリュエは  
観測小屋の切り妻壁を取り付ける作業に  
かかり、日食観測の際に壁が開いたり移  
動したりできるようにした。この作業にか  
かなりの熟練と労力が必要である。観測  
小屋のほかの部分自分たちで作らなけれ  
ばならない。写真乾板箱の用意は私の  
仕事として残ったようだ。私は既存の  
小箱にさらに80個ほど追加しなければ  
ならないことに気が付いた。

それでまたキッド皮の古い手袋をつけて  
ペンキ塗りに従事した。明日はビロード  
を切り抜いてそれを張り付けることにな  
ろう。

町ではどうも小銭が全く不足している  
らしい。円が換金できないのだ。近くの  
店でちょっとした買い物をしたときには、  
円を渡して相当のお釣りを貰うのだが、  
これは後になって精算される。町にはカ  
ラスが多い。彼らは英語を喋らず、「コー  
、コー」ではなく「アー、アー」と鳴  
いている。

ほかの人達は、僅かであるがまだ私に  
食事について何か言ってくる。テー  
ブルに着いてこれから食事が始まろう  
としたとき、「主任、今日は何が出ます  
か?」と聞いてきた。私はその意味が  
全く分らなかったの、こう言った。「  
今日は少し皆を驚かせるものだ。」そ  
れでコックに何か言ったとき、誤解が  
生じたようだ。私は町で売っている玉  
ねぎを見て、時々これを使うように提  
案していたのである。その次の夜、食  
事の最後でいつもの缶詰のフルーツや  
干したすももを食べているとき、コ  
ックは玉ねぎのシチューを皆に2杯  
ずつ出したのである。これはとても  
よかったのだが、なぜか皆は食事時  
に早く来なくなった。

**7月22日** フランスの軍艦「アル  
ジェー」号が今朝港に姿を現した。日  
食観測担当の教授（前出のデランドル）  
をここに招待した。彼は私にこう言  
った。「われわれ皆が元気なことをお  
伝えするのは嬉しいことだ。二、三日  
前に気分が悪かったときに、あなた  
がくれた薬を数錠飲んだら全快した。  
あなたは名医だ。」

トッド教授は私からカフスボタンを  
借り、「白ワイシャツ」の正装で、午  
後にどこかに出かけた。おそらく  
フランスの軍艦に招待されたのだと思  
う。このような出来事以外には、とく  
に記録することはない。

**7月24日** 昨日は朝は晴れたが、午  
後になると曇ってきて、とても強い  
風が吹いた。観測小屋の屋根用とし  
て準備された機材の一部は、食糧庫  
のドア1枚だけでなく2枚使うこと  
で、いま工事中である。（あなたも  
実情を知れば、食糧庫のドアに転  
用することだろう。）これはしっ  
かり

と固定しなければならない。

今日もまた雨で曇っている。とても寒い。食堂に行って仕事をしたが、ここは少し暖かいのである。あなたに巻くのを手伝ってもらった緑色の電線を、電話交換盤の端末に取り付ける作業をしている。ジェームズ船長は、これまでにあなたが聞いていないなら、それを話すだろう。これはまさに電話交換手が行なう作業である。

昨日、私はアメリカ風にこま切れ肉の寄せ集め料理を朝食に出したい、と考えた。小川氏を迎えたので、コックにその件について意見を聞いた。私は朝食の内容について説明したいことがいくつもある。どうもそこには何かひねくれた気持ちがあるようだ。私がいうのは肉とポテトがほどよく調和した素敵な料理で、枯れた感じでうまくキツネ色に焼いたものなのだが、それが夕食の最後に出てきたのだ。それが全くわからない。料理で遊ぶのはもう止めてくれ。1週間続けて毎日の夕食にこの肉料理が出て、朝食では一片も出ないのは間違いなさそうだ。仕事は明るい気分でやるものだ。トンプソン氏が何も発言せず、また脳の病気で休まないなら、私は晴天の下でいい絵画を見ていたい、という気持ちである。

皆さんは、われわれが目的に向かって一生懸命に動いている、と信じていることでしょう。

**7月27日** 昨日の午後、アンドリュー、フランク・トンプソンと私が、歩いて2マイルほど離れたアイヌ人の集落に行った。首長の住居があり3人の男がいた。そのうちの一人は立派な風貌の人物で、清潔であればもっと称賛したことであろう。フランクの持っている本の助けを借りて、私はアイヌ人の楽器を求めていて、買うつもりがあることを伝えたが、結果はうまくいかなかった。万事「アリマセン」が回答であった。彼らはほとんど何も持っていないようで、魚と米以外はすべて「アリマセン」である。

また終日雨なので、ゴム靴、レインコート姿で遠出した。その途中で「トンプソンのパパ」に出会った。彼はここに来てから気分転換と健康維持のために散歩しているのであるが、現場で会ったのは初めてである。

トッド教授も昨日は少し仕事を休んで自室の

整理をした。そろそろ夫人が着くので、その準備と思われる。彼女が着いたらあの詩人の句を口ずさむことだろう。

「来るのを待ち焦がれる眼差しが、それが実際に来たときに一段と輝かしくなるのを見るのは、心楽しいことだ。」(バイロン『ドン・ジュアン』の詩句)

**7月29日** 昨日われわれに手紙が着いた。皆さんは瀬戸内海へ出発しようとして、ひどい目にあつたらしい。強風が吹いたかと思うと、全く無風だったり、帆船は遅々として進まない。そのような皆さんの不運の様子から判断すると、ここで「コロネット」号に再会するのは断念せざるを得ないようだ。私は日食の当日に、皆さんに歓喜の連絡ができるかどうか、とても心許なく思っている。

今日は町中興奮して大騒ぎになった。数日前に町長が天皇の肖像を受け取りに紋別に向かった。これは町の学校に交付されるもので、新しい校舎に8月11日に納められ、肖像はそのときに公開される予定である。天皇の肖像の運搬にあたっては、天皇本人に対するのと同様の敬意をもって扱うことになっている。

それで今日の午後に汽船から陸に揚げるについては、ちょっとした儀式が執り行なわれた。一艘の新しいサンパン(小舟)が、大勢の男たちが漕ぐ別のサンパンによって、綱で汽船に引いて行かれた。そのサンパンには周りに紫色の布がかけられた天蓋があり、屋根は白い旗で覆われている。2艘のサンパンはもちろん多くの旗で飾られているが、町の道沿いにも旗や赤、白の提灯がいくつも取り付けられた。天皇の肖像は四角い箱の中に納められていて、それが白い布で包まれ4本の脚が取り付けられている。それが2本の横棒に結び付けられているので、男2人がそれを肩に担いで運ぶことができる。

上陸地点から校舎に至る道筋に沿って、前もって砂が少し盛られた。それで行列が動き出す直前に、その盛った砂が、肖像ではなくて天皇自身がその上を通るかのように、道の上に新しく敷き均されるのである。肖像が入った箱は、白い着物を着てカトリックの司教がかぶるような黒帽子姿の男たちによって運ばれた。学童た

ちは、よそ行きの身なりでさっぱりした顔をしていて、とても愛らしく見える。学童たちは肖像の上陸地まで行進し、男女別に2列に整列した。そして肖像が前を通過した後は、彼らは列を改めて、行列について校舎に向った。ただ学童たちは、このことをどこかに忘れてしまうだろう、という印象は否めない。

観測隊の作業についていえば、観測小屋が完成し、アンドリューが担当した折れ曲がる屋根と切妻の壁はうまく出来上がった。計画では2本のマスト、さらに張り綱や滑車、揚げ綱などを設置することになっているが、そんなことをやっているとして「すべて終了」してアメリカに帰航するときにも、まだ全体の作業が進行中である、ということになりかねない。私はこのようなやり方は望まない。もし私が「コロネット」号に戻れないなら、「わが道を行く」しかない。

**7月31日** 昨日は終日にわか雨が多く、雷鳴や稲妻も少しあって、変化のある天気であった。昨夜は気がふさいで、日誌が書けなかった。ティータイムの直前にはまた別の患者を診ることになった。ゲーリッシュ氏がやってきて、何かウイスキーがないかと聞いてきた。悪寒のような状態だと言うのだ。私はニューヨークを出発して以来、ずっとモノグラムのライウイスキーを小瓶に少量入れてもっている。その1日分を渡し、後でキニーネ剤を飲むよう勧めた。また頭痛に効くナンバーワン錠を渡したら、今日は全く元気になった。私はこの遠征観測隊の医官として適切に対応しているのだろうか？

**8月2日** 日食当日が、今日のように申し分のない日であったらと思う。太陽像を使ってグリセリン時計を運転してみたが、トッド教授は時計の動きぶりにとても満足したようだ。午後にはアンドリューと警察官が、馬でおよそ3マイル離れたアイヌ人集落へ行った。私はアンドリューに、以前から欲しかったアイヌ人の横笛を見つけてくれるよう頼んだのである。途中の小川ではアンドリューの馬は慎重に下って渡河したが、そのときにゴム靴に水がいっぱい入ったものの、ほかには事故はなかった。結局、楽器のようなものは見つからなかった。

今日皆元気であるが、5日連続で太陽のない日が続く、精神的にも肉体的にも悩まされている。観測作業がすべて終われば、全く楽しい気持ちになるだろう。私の「コロネット」号へのホームシックは、重症であることを自覚している。

**8月3日** 日食まであと5日しか準備日がない。その日は間違いなくコロナが現れるのか、それとも苦しい失望の日になるのか。今日は終日ほぼ晴天であった。日食のある3時5分には太陽はいい状態で出ている。当然のことだが作業は相当きつい。今日はまた覆いを作るために縫い付け作業をした。これは「上に取り付ける」のではなく、入ってくる光を少なくするために、望遠鏡に先端に取り付けるのである。だから覆いの先には丸い穴がある。その部分は厚い黒紙で作られ、これを覆いに縫い付けた。そういうわけで、もしもあなた方の覆いを修理する必要があるならば、私に言ってください。

ところであなたは、私が楽器を作りだしたら、どう思いますか？あの警察官は、竹を材料にして弦楽器のようなものを作った。これはフランク・トンプソンがやりだしたことで、彼は葉巻の箱に真っ直ぐな木材をつないで、それに3本の弦を張り三味線に似たものを作った。これに勝るものはないと私が思いついたのは、数枚の非常に薄い板切れを使ったもので、その板はトッド教授が作った人から買ったものである。その板切れとほかの木材を使って、マンドリンに似たようなものを作ろうとしたが、それは出来上がればバンジョーのような弦楽器になったことであろう。これはここだけのその夜限りの思いつきに過ぎない。あなたは、私が一日中機械に関する仕事ばかりしている、と思っているかも知れない。しかし私はこのようなものを作るのが好きなのである。夜は少しは長く起きていようとしても、結局はすぐに寝てしまう。私はいつも9時までには寝て、朝は早く目が覚めるのである。

コック助手は早起きで、とても騒々しい。部屋の内張り壁は薄いので、もう一度寝ようとしてもほとんど寝られない。加えてカラスが早くから起きていて、4時半ごろには屋根で遊び戯れている。このカラスが屋根板の上を遊びまわる

のを聞くのはおもしろい。彼らが演ずるのがツーステップなのかワルツなのかはわからないが、その音には確かにユーモアがある。

もう一つ、早朝に注目した小さな出来事がある。初めパチパチという音が聞こえてきて、上の方を見るともうもうとした煙が頭上を通り越して行き、それが次第に屋根の垂木の中に消えて行った。それはコックが火を焚き始めたのであった。ここには煙突がないので、煙は何か自分の行く道を探さなければならない。炭がおこればすべて元に戻った。

**8月6日** 昨夜の作業の後で、昨日到着したトッド夫人に付き添って、町の2本の表通りに行き、買物ができる場所に案内した。夫人の出現で町中大騒ぎとなった。子供たちが彼女について歩き、ブリキのトランペットを持った子供が、彼女のそばでそれを元気いっぱい吹き鳴らしながら歩いた。それで私は、トッド夫人がこの地を訪れた最初の外国人女性である荣誉に浴したのだ、と理解した。

今日は、観測小屋内の望遠鏡に接続するいくつかの機械装置の試験を行ない、非常にうまく作動した。観測隊が小樽に戻る船は、14日に当地に着く予定と聞いた。われわれは元気を出して諸準備に取り組みなければならない。

今日は部分的に曇りであった。雨が降るなら土曜日(8日)の夜までに降って、「これでおしまい」ということになってほしい。トッド夫人は食料全般について手助けしてくれて、すでにきれいなテーブルクロスを作った。

**8月7日** 今朝は曇り。午後は雨になった。皆忙しく動いているが、多分に神経過敏になって、いらいらしている。私は地元の床屋に行って、散髪をしてもらった。床屋が刈り上げにあまりに長い時間をかけるので、それを止めさせた。私にできる唯一のことは椅子から体を起こすことぐらいのもので、私の話すことは、床屋には全く通じない。それで私は、じゃ香の匂いがする液体で洗髪するのを、床屋にさせずに自分でやる、という離れ業をやったのである。結局、散髪とシャンプーで20銭であった。

トッド教授にジェームズ船長から電報が届い

た。あなた方は温暖な天気恵まれて、こちらで想像している場所を動いているのですね。

**8月9日** この日誌の最終日の記録を綴るのは難しいことはわかっている。私には、その時の期待や不安、そして結果として失望に終わったことを、言葉で表現する能力がない。

朝は小雨で始まり、そのうちに晴れ間がところどころに見えるようになった。われわれは午後の晴天に十分望みを抱いていた。8時にアンドリュウと私は、善良なアメリカ国民であり、また善良な「コロネット」号の人間として、外に出て国旗を掲揚しそれに敬礼した。

トッド教授から私と夫人の2人に、灯台の上に登ってそこで日食時に現れる「コロナ」をスケッチしたらどうか、と言われて、11時ごろに2人は小さな写生板をいくつか持って、灯台の下見に行った。写生板には月の輪郭を示す円が記入されていて、これは「コロナ」の位置、形態を描く際の目安になる。灯台に着くまでに、風は北西に変わって、その方向には大きな晴れ間が広がっていた。これに大きく勇気づけられて、「コロナ」の出現に大きな確信をもったのであった。

ああ、それが30分もたつと雨に変わった。このころ(箱根)宮ノ下やほかの観測隊からも電報が入り、北海道の各地は曇りか霧に包まれている、という状況が知らされた。雨が止んでも、空は晴れない。日食の進行中は、雲を通して三日月のように欠けた太陽が見られたし、皆既になれば「コロナ」はそこにあるのだ。

皆既が始まる約20分前に、トッド夫人と私は観測場所の灯台に行った。ゲーリッシュは前もってカメラを据え、皆既の撮影に備えて海岸近くの船に焦点を合わせていた。私はその時が到来すると、キャップを取り外し、そして元に戻すことになっていた。

皆既が近づくにつれて次第に暗くなっていくほかは、あたりの状況に特段の変化はないようであった。そのような中で数羽のカラスが森の方に飛び立ち、小鳥も落着きなく飛び回った。皆既まであと2分になるまでは、予想はしていたほどには暗くならない。

太陽が目でそのまま見えるほどに雲があつて、日食の進行をはっきりと見る事ができて、い



よいよ皆既の時刻になった。もっと暗くなるはずだと思っているうちに、それが突然に変化して、驚くような不思議な美しい光景が現われ、それをかたずをのんで見ていた。まるでこの世の景色とは思えない。北西の空は厚い雲で覆われ、地平線は日没のときのように美しくオレンジ色に輝いた。しかし実際の日没なら、このような色彩にはならず、またこれほど急激には現われない。南西の空は明るく輝いて、薄い黄色を帯びている。

このような美しさやその驚異、そしてこの世のものとは思えない光景を、うまく伝える能力は私にはない。この壮麗な光景はわずかに皆既の間しか続かず、始めと同様に急速に消えた。そしてあたりは前のように再び明るくなったのである。

私がカメラのキャップを元に戻そうとして下を見たら、トッド夫人が涙を浮かべているのが見えた。私の目にもきっと涙があったに違いない。大きな失望感に陥り、かつての白河(福島県)での経験もこの苦渋の思いを和らげてくれない。トッド教授は冷静なようだったが、きっと何も語らずにじっと耐えていたのだろうと思う。

日夜を費やしての諸準備は、何の価値もない骨折り作業に終わった。今は荷物をまとめて、コロナを見ないまま「コロネット」号に戻るのである。私はあなた方がここに来なくてよかったと思っている。女性一人が一度涙を流しただけで十分で、それ以上は耐えられない。これで私の日誌は終わる。楽しく読んでもらえればそれで十分満足である。それは辺境の地における労役ではなくて、楽しく愉快的作業だったのだから。

「主任技師」記

\* \* \*

## あとがき

見るとおり、長期にわたる事前準備にもかかわらず、結果として不首尾に終わった日食観測の経過を、一隊員の立場から率直に描いている。期待と不安が交錯する中で、人間関係のストレスからくる隊員間の軋轢なども述べられていて、このような公式の報告などには表れない現場の

生の声には、巧まない臨場感がある。

日食の二日後(8月11日)には、地元枝幸の小学校の新築落成式があり、それに招待された各観測隊の首脳たちは、乞われて大きな絹布にそれぞれの思いを墨書した。ペンバートンも筆をとり英文をしたためているが、その意味は次のとおり。

「われらが遠い国から枝幸に来たのは、太陽のコロナを見るためであったが、それは見られずに終わった。しかしこの枝幸に上陸してからの、心のこもった歓待の微笑みは、われらの心に陽光をもたらしてくれた。このことはいつまでも忘れないだろう。」

この珍重すべき寄せ書きは、惜しくも昭和15年の枝幸大火で焼失し、今は残された写真で偲ぶしかない。

このあと観測隊メンバーが再び観光組と合流して、「コロネット」号でサンフランシスコに向けて横浜を発ったのは9月2日のことであった。

なお枝幸町では、平成元年(1989)に、このときのアメリカ、フランス両観測隊の来町を記念して、立派な「日食観測碑」を建立した。アメリカ隊の記念碑は町立図書館の前、フランス隊の記念碑は町商工会館の前で、両国の天文学者たちの大努力の跡を今に伝えている。

またペンバートンの日誌には言及はないが、このとき枝幸には日本の東京天文台の観測隊も布陣しており、その観測地には木の標柱が建てられている。

## 参考文献

- Mabel. L. Tood, 1898 ; Corona and Coronet.  
Houghton, Mifflin and company  
高島孝宗・山浦清, 2010 ; メイベル・トッドの見た百年前の枝幸. 枝幸研究2